

恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式（下）

——国木田独歩「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」——

丁 貴 連

書簡体小説という叙述様式と近代日本文学

いくつもの手紙を連結させて物語を綴っていく書簡体小説の起源は古く、紀元一世紀頃のローマのオウィディウスの韻文恋愛詩『名高き女たちの手紙』にまで遡ることができる。しかしもちろん、近代的な書簡体小説の起源は十八世紀頃にある。イギリスのリチャードソンの『パミラ』（一七四〇）を皮切りに、フランスではラクロの『危険な関係』（一七六四）、ドイツではゲーテの『若きヴェルテルの悩み』（一七八四）のようなすぐれた書簡体小説が登場した^①。とりわけ『若きヴェルテルの悩み』の出現は、その後の書簡体小説の隆盛に大きな影響を及ぼし、書簡体形式が世界中に広がり、一つの独立した小説様式として確立される契機を作ったのである。

『若きヴェルテルの悩み』は、日本でも早くから注目され、島崎藤村ら『文学界』の同人たちが英訳を介してではあるが、早くもそ

の影響を受けているばかりでなく、一九〇四年にはすでに完訳が出るほど人気があった^②。これは韓国においても例外ではなかった。

一九二三年に『若きヴェルテルの悩み』がはじめて翻訳・紹介されて以来、書簡体小説は当時の作家の間でもっとも新しい小説様式として高い関心を集め、一九二〇年代には世界に類をみない書簡体小説が文壇で大流行した^③。一九一七年に発表された李光洙の「幼き友へ」はまさにその先駆的な作品だったのである。

ところが、全編手紙だけというこの書簡体小説は、「幼き友へ」が執筆される前、たとえば、古典小説や一九〇〇年代の新小説にはまったく見られない新しい手法であった。韓国文学にはこれまでなかったこの手法を、李光洙は如何にして習得したのか。前号において述べたとおり、作品を比較してみると、李光洙が独歩の作品を受容したという結論を下すことができるが、もちろん李光洙が創作した形式である可能性も否定できない。しかし、比較文学的観点から

みれば、李光洙が外国文学の影響を受けていた可能性の方が高いとみるべきであろう。

李光洙は一九〇六年から一九〇九年と一九一五年から一九一七年の二度、日本に留学しているが、その間西欧や日本の近代小説を読むことによって、小説の手法を学んでいたという明白な事実があることを考慮すべきではなからうか。この書簡形式もそうした彼の小説研究の成果の一つであった。そこで、李光洙がこの小説形式を導入したことが韓国の近代小説史において如何なる意味をもつのかを明らかにするために、李光洙が「幼き友へ」を執筆するまでに接したと思われる、韓国、日本、西欧のそれぞれの書簡体小説を比較文学史的に考察してみる必要があると思う。

(1) 韓国における書簡体小説

まず、韓国における書簡体小説についてみるならば、「幼き友へ」より前の小説に書簡体形式がまったく用いられなかったわけではない。もちろん全編手紙だけという完全な書簡体小説は一編もなかったが、書簡の一部を小説の中に挿入することによって、事件の展開や構成に変化を与えたものは意外と多い。その代表的なものとして『春香伝』『淑英娘子伝』『雲英伝』『周生伝』『沈生伝』『英英伝』などがあげられる^①。これらの古典小説に挿入された手紙は、主に

男女の出会いや愛情の成就という役割を果たしている。「男女七歳にして席を同じうせず」という厳しい社会倫理の中でも、男女間の愛情は塀を越えて成就され、書簡は出会いと愛情成就の意志及び感情を伝えるものとして機能していた^②。ただし、これら朝鮮時代の古典小説に関しては、次のような見解がある。

書簡の形式が小説の中に挿入された場合はすでに古く、李朝小説のなかでもよく見かけられる。(中略)ただし、李朝小説のなかに挿入された書簡には現代小説の特殊形態としての完全な書簡体は一編もない。しかし、叙述や構成の重要部分として機能するものは相当ある。(中略)しかしながら、近代以前にはこうした書簡形式を完全に小説として拡大・変形させたり、あるいは全面的な置き換えや代替が行われたりすることはなかった。つまり、書簡は実在するものであるので虚構である文芸作品へと発展させることができず、小説形態に対する固定観念もなかなか崩すことができなかったからである^③。(拙訳、以下同様)

この引用文からもわかるように、古典小説の中にも書簡を用いた作品がかなりある。しかし、それは近代小説における書簡体形式とは本質的に異なるもので、そこに断絶のあることが指摘されていることに注意すべきだろう。

それでは、郵便制度の確立や通信の発達によって手紙を書く習慣が人々の日常生活の一部になりつつあった開化期に書かれた新小説の場合はどうであろう。崔瓚植の『秋月色』『金剛門』『海岸』『雁の声』、李海朝の『驅魔劍』、金宇鎮『榴花雨』、李相協の『涙』⁽⁷⁾など、全編書簡だけの作品はまだ現われていなくても、書簡の一部を挿入して物語の展開に変化を与えるものは、明らかに李朝時代よりも増えている。また、それまでの出会いや愛情の成就という機能から、人を民に陥れる計略の手紙や父母の結婚強要への反対の意思を伝える家出の手紙、あるいは迷信に追従して滅んでいく本家を心配する手紙など、時代の変化とともに手紙の機能も変わっている⁽⁸⁾。しかし、古典小説の場合と同様、書簡そのものが作品の構成に変化を与えることも、構成の中心になることもなかった。従って、完全な書簡体小説の出現は、一九一七年の李光洙の「幼き友へ」まで待たねばならなかったのである。

『諺簡の研究』を著した金一根氏は、韓国における書簡体小説が「過去の伝統文学の延長線で発展してきたのか」、それとも「西欧の近代文学からの移入なのか」という問題について、「書簡体小説の場合は西欧文学の影響によって可能になった」と結論づけた後、次のように述べている。

古代小説の場合には朝鮮王朝末期に至るまで、さらには甲午

更張以後新小説が出現するまで書簡体小説は見当たらない。西欧でも十八世紀に入ってようやく書簡体小説が登場し、それが近代小説の起点となったので、韓国の古代小説はもちろん、東洋において書簡体小説の自主的な出現は期待しにくい状況であり、事実であった。

したがって、一九一七年に試みられた李光洙の「幼き友へ」という書簡体小説の技法は、おそらく日本が取り入れた西欧のそれを導入したと見るのが妥当であろう⁽⁹⁾。

ただし、ここで近代の書簡体形式が西欧文学の影響によるものだという見解に関してはわかには賛成しがたい。当時の韓国社会の状況や翻訳事情から考えると、むしろ日本近代文学の影響によると見た方が妥当なのではなからうか。近代韓国文学における最初の書簡体小説である「幼き友へ」について、日本文学の影響に触れた朱鍾演氏の次のような見解がある。

書簡体小説が日本を経て韓国に移入されたことは事実だが、具体的にどういう形で行われていたのかについてはほとんど知られていない。これは本格的な比較文学的アプローチが必要だが、まだ課題として残されている⁽¹⁰⁾。

朱鍾演氏が指摘するように、韓国における書簡体小説の形式が「日本」からの影響であることはほぼ間違いない事実である。さらに、この「日本」という漠然とした示唆をより細かく分析しようとしたのが趙鎮基氏である。氏は、有島武郎の書簡体小説『宣言』（一九一五年）と「小さき者へ」（一九一六年）を挙げて、この二つの作品が韓国における書簡体形式の形成に大きな影響を及ぼした事は見逃せないと指摘している^⑪。ただ惜しいことには、氏の指摘はそれ以上具体的な分析にまでは至っていない。そこで本稿では、改めて日本近代文学における書簡体小説に注目してみよう。

（2）日本における書簡体小説

近代以前の日本文学の中には、完全な書簡形式で書かれた書簡体小説が少なからず存在する。世界における書簡体小説の嚆矢とされている『パミラ』に先行すること五世紀の平安朝末期に『堤中納言物語』の中の一編として書簡体小説「よしなしごと」が成立しており、同じく『パミラ』に先行すること半世紀の一六九六年には、日本における書簡体小説の完成期の作品といわれる井原西鶴の『萬の文反古』が刊行されている^⑫。

暉峻康隆氏は、その著『日本の書簡体小説』（越後屋書房社、一九四三年）のなかで、世界における書簡体小説の嚆矢とされている

『パミラ』に半世紀も先んじている『萬の文反古』は、単にスタイルの上で先行しているのではない。名もない庶民を主人公とし、庶民生活の明暗を厳しく追及しているという点から見ても、近代小説として世界の文学に先行していると指摘している^⑬。しかしながら残念なことに、明治以後書かれた書簡体小説の大方は、過去に優れた遺産を持つにもかかわらず、他の近代文学一般におけると同様、外国のスタイルを学んだものであると、氏は主張している。つまり、近代の日本の書簡体小説は韓国と同じく、伝統文学からではなく、西洋文学の強い影響下で形成されていたのであるが、その日本の書簡体小説が韓国に影響を及ぼしていたのである。

韓国の近代文学者の日本留学は、一九〇五年から本格的にはじまるが、一九〇〇年を前後に、日本では沢山の書簡体小説が書かれた。例えば、森鷗外によるアンデルセンの作品を翻訳した『即興詩人』を皮切りに、国木田独歩「第三者」「鎌倉夫人」「おとづれ」など、永井荷風『監獄署の裏』、近松秋江『別れた妻に送る手紙』、有島武郎『宣言』、芥川竜之介「二つの手紙」、菊池寛『ある抗議書』、武者小路実篤『友情』など、完全な書簡体小説だけでもかなりの量が出版されている^⑭。この他に作品中に書簡が挿入されたものを含めると、当時書簡体小説は作家達の間で最も人気のあった叙述様式の中の一つであったことが知られるが、そのなかでも、とりわけ国木田独歩はもっとも書簡体小説を好んだ作家として知られる。

独歩は約八〇編の短編小説を残しているが、その中で完全な書簡体で書かれているものが十三編もある。列挙すると次の通りである。

「おとづれ」（一八九七）「野菊」（一八九七）「火ふき竹」（一八九八）「無窮」（一八九九）「初孫」（一九〇〇）「湯が原より」（一九〇三）「鎌倉夫人」（一九〇二）「第三者」（一九〇三）「一家内の珍問」（一九〇四）「夫婦」（一九〇四）「都の友へ、B生より」（一九〇七）「都の友へ、S生より」（一九〇七）「渚」（一九〇七）¹⁵

ここから言えることは、独歩が創作の初期から晩年に至るまでは一貫して書簡体小説に興味を示しているということである。この外にも、「源おち」や『武蔵野』を始め、書簡が作品の中で重要な役割を果たしている作品も多いことから、いかに独歩が書簡体の形式を好んで用いていたかがおのずからうかがえよう。しかも、作品のテキストに収められている書簡にはいろいろな種類があつて、「鎌倉夫人」「初孫」のように作品自体が一通の書簡になっているもの、「おとづれ」のように同一の人物の手による数通の手紙から成っているもの、「夫婦」「第三者」のように二人が取り交わした数通の手紙から組み立てられているものなど、独歩は書簡の様式にも様々な工夫を凝らしていた作家なのであった。それくらい独歩の書簡体

小説はその量と種類において同時代の作家を遙かに越えて多かった。季光洙の日本留学は一九〇六年から始まっていることから、彼が一九〇六年を前後にして出版された日本の書簡体小説に接する機会には充分にあり得たと思われる。ところが、一九〇八年六月は、独歩がづらい闘病生活の果てに亡くなったことに当たり、『新潮』をはじめ『新生』（第二次）『趣味』『中央公論』『新小説』といった有力な文芸雑誌が、それぞれ追悼号を組んだ。これは、かつて文壇の雄である尾崎紅葉の死においても見られなかった光景であった。このような異常ともいえる独歩ブームの時運のなかで、独歩の作品は広く世間一般に流布し、若い読書人たちに盛んに読まれるようになった。ちょうどその頃、季光洙は明治学院中等部に在学していた。日本文壇の動きを敏感に感じて取っていた文学青年季光洙が、独歩の書簡体小説を読んでいる可能性ははなはだ大きいと思われるのだ。

ところで、書簡体小説の構造と関連して、尹寿英氏は「韓国近代書簡体小説研究」（一九八九）の中で、十七、八世紀の西欧の書簡体小説が、複数の人物の間で取り交わされる「相互送信型」を特徴としているのに対して、韓国の書簡体小説は一人の発信者が一人の受信者に送る「一方送信型」であると指摘している。発信者と受信者が互いに創造的な手紙を取り交わすことによって、小説の内的効果を高める西洋の書簡体小説と違い、韓国の書簡体小説は、受信者からの返事はなく、たとえ返事がある場合も、その返事は作品の中

では何の効果も発揮しない。書簡は主に発信者の心情をただ一方的に表すために用いられているに過ぎない。従って、韓国の書簡体小説は西欧作品の影響が、日本を経て入ってきた結果とする従来の考え方は、見直さねばならないし、むしろ韓国の古典小説のなかにその源流を求めるべきである、と指摘している⁽¹⁶⁾。

しかし、韓国ではじめて「一方送信型」で書かれた「幼き友へ」が、独歩の書簡体小説「おとづれ」の影響を受けていることを考えると、このような指摘があるとはいえ、問題はそう簡単ではない。というのは、前述したように、独歩は書簡体小説の構造において「一方送信型」をはじめとするさまざまな書簡形式を用いたからである。こうした独歩の一連の書簡体小説を、李光洙は一九〇六年からの第一次留学時代に読んでゐる。それらを読むことによって彼はそれまでの韓国の小説では見られなかった新しい形式に興味を覚え、創造力を強く刺激された。そして、帰国してしばらく経った一九一七年に、韓国で始めての近代的な書簡体形式による小説を発表したのである⁽¹⁷⁾。

(3) 日本留学と西洋の書簡体小説

もちろん李光洙が韓国の近代文学にはなかった書簡体形式の短編小説を書くに際して、十七世紀以来の西欧の書簡体小説の伝統をまっ

たく知らなかったとは思えない。一九〇七年四月から一九〇九年三月まで明治学院中等部に在学していた李光洙は、日本の小説だけではなく、西欧の小説も数多く読んでいたことを示す記録が残っている。独歩の一連の書簡体小説とともに、西欧の書簡体小説からも影響を受けただろうことは十分に考えられる。しかし、李光洙が読んだと記録されている西欧の作家たちの作品名からは、彼が書簡体小説を読んだことを証明することは困難である。また、たとえ作品名が記されている場合も、実際にその作品に触れたかどうかということも考えられるし、「幼き友へ」の執筆以後に読んだものも考えられる。というのは、彼は「ゲーテと私」という文章の中で、

「ゲーテと私」というものを書いてほしいと言われたが、私はゲーテについてまったく無知である。ゲーテの作品の中で読んだのは『若きヴェルテルの悩み』と『ファウスト』だけなのである。『若きヴェルテルの悩み』は学校のドイツ語の教科書で習い、『ファウスト』は森林太郎博士の日本語訳と新渡戸稲造博士の『ファウスト物語』で読んだ(中略)人格的にも芸術的にも彼の感化を受けたことはなく、『ファウスト』はどうもよいとは思われないし、むしろ退屈だった⁽¹⁸⁾。

といっているからである。この文章から分かるのは、李光洙は書簡

体小説として世界的に名高い『若きヴェルテルの悩み』について知っていたと思われる。ただし、李光洙が読んだ『若きヴェルテルの悩み』は、ドイツ語の教科書であり、読んだ時期も一九一四年にはすでに構想されていたと思われる一九一五から一九一七年の間である。要するに、「幼き友へ」の執筆に、ヨーロッパ文学の直接的な影響はなかったと思われる。

なお李光洙は、明治学院中等部時代、そして五山学校の教師時代から大陸放浪時代にかけて、さらに早稲田大学時代に読んだ作家や作品を、「金鏡」（一九一五）、「私の少年時代―十八才少年が東京で書いた日記―」（一九二五）、「多難たる半生の途程」（一九二六）、「彼の自叙伝」（一九三六）、「私の告白」（一九四八）、「私」（一九四八）などの回想文に克明に記していた¹⁹。とりわけ、繰り返し述べて言及される作品名を列挙すると、次の通りである。

夏目漱石…『三四郎』（2）『坊っちゃん』『虞美人草』（2）
『吾輩は猫である』『文学論』

木下尚江…『火の柱』『良人の告白』『霊か肉か』『飢渴』

田山花袋…『蒲団』『花袋集』

島崎藤村…『破戒』『春』『藤村詩集』

徳富蘆花…『思ひ出の記』

国木田独歩…諸短編集（2）

永井荷風…『ふらんす物語』『あめりか物語』

バイロン…『海賊』（4）『天魔の怨』（4）『バイロン伝記』
『ドンファン』（2）

トルストイ…『我宗教』『アンナカレーニナ』『復活』

ゴーリキー…『ゴーリキー短編集』

プーシキン、モーパッサン、イプセン「（ ）」の中の数字は、李光洙が記録した回数

このリストからもわかるように、李光洙が関心をもって読んでいた作家は、西欧ではバイロン、日本では夏目漱石である。ところが、彼がこの夏目漱石について言及するときには、必ず独歩にも触れているという事実には留意する必要がある。例をあげてみよう。

東京へ行ってようやく新文学に接することができました。最初に読んだ作品が何だったのかは覚えていませんが、国木田独歩、夏目漱石、バイロン、島崎藤村、田山花袋、トルストイ、木下尚江、これらの作家のものを読みました²⁰。

日本人の作品では、夏目漱石と国木田独歩を愛読していたが、しかし今では夏目のものはそれほど再読したいとは思わないが、国木田独歩の芸術だけはいつも読みたいと思う²¹。

国木田独歩の短編とともに夏目漱石の長編が好きだった^②。

このような李光洙の発言は独歩文学に対する彼の関心がいかに大きかったかがわかる。ここであらためて注目すべきことがある。それは李光洙が読んだと記している作品リストの中に独歩作品以外に、書簡の形式を用いたものがないという事実である。もちろん、作品リストに取りあげられた作品のほかにも多くの作家たちが書簡形式の作品を書いていることはいうまでもないし、作品中に書簡が挿入されているものもある。しかし、少なくともこのリストのなかには完全な書簡形式による作品は一編もないという事実は見逃せない。また、李光洙が取り上げている書物や作家は、彼が一九一〇年に明治学院中等部を卒業して以来五年後、一〇年後、二六年後、さらには三八年後にそれぞれ発表してきた一連の回想録や日記、自叙伝のなかで紹介しているものである。

従って、これらの書物や作家に対する李光洙の記憶の信憑性にはなほだ疑わしいものがあると思われる。この点に関して波田野節子氏は次のような見解を示している。つまり、中学卒業後五年しか経っていない時期に書かれた「金鏡」(一九一五)が一番信頼できるだろう。また、書名と作家名が一番多くあげられている「日記」(一九二五)は、実際の日記がもとになっているはずであるから信憑性は高いが、発表する段階で著者によって手を加えられている可

能性は否定できない。「多難たる半生の途程」「彼の自叙伝」(いずれも一九三六)で語られている書物や作家は、四半世紀という時間の濾過作用を経ていることを考えると、李光洙の心にもっとも深く刻まれたものだと考えられる。たが、三八年後に書かれた「私」(一九四八)になると、他の回想とあまりにも内容がかけ離れており、むしろ「こうであったかった読書歴」と受け取るべき性質のものではないかと氏は指摘している^③。

ところで、李光洙は独歩の作品を愛読したと様々なところで繰り返し述べているはがりでなく、生涯にわたってもっとも評価すべき作家として独歩とツルゲーネフをあげている^④。このことからしても、独歩に関してはけっして読者を意識して誇張したり「創作」したりしてはいないだろうと思われる。李光洙の独歩文学への関心は、一九一〇年一月三日の日記^⑤の中に、独歩の作品の一節を翻訳しているところからも推測されるが、これまで出典不明としていた日記の翻訳は、筆者の調査によれば、「一句一節一章録」(『趣味』追悼号、一九〇八年)の中の一節(十一月八日条)であることが判明した。翻訳された一節の原文は次のようなものである。

熱沙漠々のサハラを旅する人も節々は甘き泉湧き涼き木陰青きオーシスに出遇ひて死ぬ計りなる疲を休すむる由あれど人生れ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度恋てふ真清水を掬

み得て暫時は永久の天を夢むと雖も忽ち醒めて又其淋しき行程に上らざるを得ず斯くて墓の暗き内に達するまで第二のオーシスに出逢ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈み了せぬ彼の眞清水を懷ふのみ、果敢なきものならず⁽²⁵⁾

後に「恋の日記」と改められ、『独歩小品』に収録されたこの作品は、題目が示すように、離婚の痛手から立ち直りを図る独歩と、それを支える新しい恋人榎本治子との切なく美しい恋愛物語である⁽²⁶⁾。ところが、独歩は季光洙が密かに翻訳を試みた「一句一節一章録」のなかで、「おとづれ」という小説を書いたことと、それを読んだ治子の感想を紹介している。この事実は注目に値する。

つまり、季光洙は「おとづれ」という作品の存在を知っていたのである。実際に「おとづれ」を読んでいたかどうか、その事実は確かめようもないが、次の一文は季光洙の想像力を強く刺激したに間違いないだろう。

昨夜△子から手紙が来た。ああ、憐れの乙女よ、彼女はわが小説を読んで其身を千葉富子にひきくらべた。悲しい哀れな美しい手紙であった。(中略)

自分の作た「おとづれ」が国民の友に出た。これが第二小説である。世間は冷ややかに迎へても宜しい。△子は書き送った、

「この『おとづれ』を読み玉ひし人多き中に初の一字より終の一字まで涙と共に繰り返し読たるは妾一人ならん」と自分は満足である。悲しい満足を感じる⁽²⁷⁾。

独歩は榎本治子と交際中「おとづれ」を執筆し、それを治子に送った。治子は「おとづれ」の内容に大いに感激し、その感想を手紙に綴って独歩に送っている。独歩は治子の感想を「一句一節一章録」の中で紹介し、「世間では冷ややかに迎へても」構わないと、恋人治子の評価に大いに満足した。自由恋愛や結婚制度に強い関心を示していた季光洙なら当然、「おとづれ」の中身が気になってきたはずであろう。

これらの事実から、次のことが言えるであろう。季光洙が「幼き友へ」を書く前に、強く影響を受けたと思われる書簡体形式の小説は、韓国の古典小説でもなければ、西欧文学でもない。それはまさに日本近代文学であり、第一次留学時代以来深い共感をもって読み続けてきた国木田独歩の「おとづれ」であった。

(4) 翻訳事情

最後に、当時韓国で翻訳されていた西欧の書簡体形式の小説を調べてみると、ドストエフスキーの『貧しき人々』⁽²⁸⁾は一九一九年に、

ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』は一九二三年にはじめて翻訳されているが、いずれも日本語訳を重訳したものと思われ、しかも抄訳にとどまっていることが分かる²⁹。当時、外国文学の翻訳の場合は、作品の一部分を抜粋して翻訳するか、あるいは作品の内容を短くまとめたその梗概のみを紹介する程度にとどまっていた。しかも、それらの翻訳はすべて李光洙の「幼き友へ」の執筆以後に行われている。

それに対して、日本では、すでに一九〇四（明治三七）年には『若きヴェルテルの悩み』が、久保天随によって『エルテル』という題で完訳されている。しかも、この『若きヴェルテルの悩み』の紹介及び翻訳が契機となって明治二〇年代から三〇年代中頃にかけて書簡体形式の小説が流行る³⁰ほど、その反響は大きかったと言われている。とすれば、李光洙が日本語に訳された西欧の書簡体小説に触れるチャンスはあったことになる。ただし、当時の李光洙の読書傾向を考えると、明治学院中等部を卒業するまでは独歩以外の作家の書簡体小説はあまり読んでいなかった可能性が大きい。

というのは、もし李光洙が西欧の書簡体小説を読んでいたと仮定すると、その読書記録からいって、中学を卒業して韓国に帰り、五山学校の教師をしていた頃の可能性が高いだろう。しかし、当時の李光洙は、愛情のない結婚生活を後悔するなど最悪の現実生活にふり回されていたようで、読書にふけるといった精神的な余裕は到底

なかっただろうと想像されるのである。

従って、「幼き友へ」を構想する際に、李光洙が創作のヒントともし、また契機としたのは、独歩の「おとづれ」であったと考えられる。結論に代えて言うならば、その証拠は、第一には、韓国の近代小説の中に「幼き友へ」より前には書簡のみで成立する小説がなかったこと、第二に、李光洙が第一次留学の時期に、独歩の諸短編集を耽読し、その影響を受けていたこと、その実例としては、「少年の悲哀」をはじめ初期の一連の短編小説の中に独歩の影響が認められることである³¹。これらを考慮すると、「幼き友へ」が独歩の「おとづれ」の影響によって構想され、執筆されたものであったことはほぼ間違いあるまい。

李光洙は初期の一連の短編小説の中で三人称客観叙述形式、一人称叙述形式、書簡体叙述形式、それに小説の中に日記を挿入するなど、新しい叙述様式を試みることによって韓国の近代短編小説の形象化に先駆的な役割を果たした³²。そして、その手始めとして「幼き友へ」が書かれたのである。韓国の近代文学は、この「幼き友へ」によって始めて書簡体小説を形象化することができ、近代小説史に新しい叙述様式を確立することができたのである。こうした評価を受けている「幼き友へ」に、独歩の「おとづれ」をはじめとした一連の書簡体小説が影響を及ぼしたという事実は、単に「幼き友へ」一作にとどまらずにその後、とりわけ一九二〇年代の韓国

文学における書簡体小説の形成・発展に多大に寄与したという点にその意義が認められよう。

自由恋愛の実践と書簡体小説のブーム

一八七六年、開国とともに朝鮮に入ってきた西欧文明は、それまでの人々の生活を根底から揺るがした。なかでも恋愛文化は、親の取り決めによる結婚の形しか知らなかった人々に、男と女が結婚前に自由に出会い、自由に相手を選ぶというまったく新しい結婚の形を伝えた。人々はこの新しい風習に戸惑いながらも、しだいにその風習を高く評価するようになった。その中心的な存在は日本に留学していた若い知識人であった。彼らは封建的結婚制度によって被害を被った当事者として、結婚するにあたっては個人の意志を重視する恋愛結婚を強く主張するようになった。その先駆的な存在が季光洙であったことはすでに前で見えてきたとおりである。

一九一七年に発表した「婚姻に関する管見」は、恋愛による結婚の正当性を説いた最初の評論として知られている。次の文章は若い人たちに自由恋愛の実践を決意させた一文であろう。

恋愛こそ婚姻の根本条件であります。婚姻のない恋愛は想像することが出来ても、恋愛のない結婚は想像することが出来ま

せん。従来、朝鮮の婚姻は、この根本条件を全く無視しておりました。この事実から無数の悲劇と民族的損失が生じたのです⁽³³⁾。

未だに儒教的・封建的な結婚観や結婚文化が支配的だった時代に、「恋愛こそ婚姻の根本条件」であるという季光洙の主張は、親の取り決めによる結婚に強い不満を持つ若い人たちを勇気づけたばかりでなく、自由恋愛という新しい風習を世間に広める起爆剤となったことはよく知られている事実である。若い人々はこぞって自由な恋愛を求め、かつ実践した。

一九一〇年代から二〇年代の新聞や雑誌、文学作品を一瞥すると、婚姻制度に対する批判とともに自由恋愛を主題とする作品が多く発表されていることに気がつく。これは自由恋愛が如何に同時代的なテーマであったかを如実に表している証拠に他ならない。

ところが、これら自由恋愛を扱った小説を読んでいくうちにある現象に気がつく。それは、男女間の愛情問題を描く場合書簡形式が多く用いられていることである。一九一七年、近代最初の書簡体小説「幼き友へ」が発表されて以来書簡への関心が高まった韓国では、僅か数年の後に書簡体小説の全盛期を迎える。

「二年後」(一九二〇)「七面鳥」(一九二一)「星を抱いたら泣かないほうがよからう」「除夜」(一九二二)「十七円五十銭」(一九二

三)「愛に飢えた人々」「最後の手紙」「ある女の手紙」「J医師の告白」「孵化」「浮世」「脱出記」(一九二五)「血の付いた手紙何切れ」「R君へ」(一九二六)「銭我辞」(一九二七)「出奔した妻に送る手紙」「お母さんの手紙」「五年間の手紙」「片恋者の手紙」(一九二九)など、完全な書簡体小説だけでもかなりの量が書かれている⁽³⁴⁾。こうした書簡体小説のブームが起きた背景を考える上で、次の一節は注目に値する。

近代的個人主義の自覚とともに自由恋愛が受け入れられるようになり、書簡の機能が拡大され、さらに西欧文学に対する認識が深まることによって、ようやく完全な書簡体小説が可能になったのである⁽³⁵⁾。

つまり、本来は個人が個人にあてた私的で実用的な性質と用途をもつ書簡が、韓国では自由恋愛思想の受容にもなって、書簡本来の伝達機能を越えて書簡体小説という新しい文学ジャンルを作り出したということである。

近代初期、自由恋愛思想の受容は儒教を精神的な基盤とする東アジア諸国に様々な文化的現象をもたらしたが、韓国においては、結婚の形を変えたばかりでなく、近代小説史に新しい小説形態をもたらしたという点において他の国とは違う影響を及ぼした。

もちろんこれは韓国に限ったことではなく、日本の場合も、「恋愛とは人生の秘鑰なり、恋愛ありて後人生あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ」とはじまる北村透谷の「厭世詩歌と女性」(一八九二)に端的に示されているように、「恋愛」が明治文学の重要なテーマであったことは今さら言うまでもないが、自由恋愛を書簡形式で表すという所までには至っていない⁽³⁶⁾。

いったいなぜ、韓国では男女間の愛を書簡形式で表そうとしたのか。書簡体小説の起源を、恋する男と女の間実際に交わされた手紙に求めるとするならば、書簡体小説に愛情物語はつきものである。しかし、それにしても韓国の場合はとりわけ多い。その理由の一つに自由恋愛に対する誤解があげられよう。

韓国が長い間儒教の価値観を頑なに守ってきた国であることは周知の事実である。儒教の価値観においては、「男尊女卑」「女必従夫」という言葉に象徴されるように、女は子を産む道具であり、跡継ぎを作るための生殖機能という面でしかその価値が認められていない。中でも決定的に女性を縛っていたものは「貞操」思想である。女の子が七才になると、「内外法」を適用するのはもちろん、婚約者が死んだら「マダン寡婦」といって十四、五才の幼い子にも一生貞節を守ることを強要した。こうした社会倫理の下では、「婦道」を守った女だけが国に誉められるのだった。そこに西洋の新しい恋愛文化が入ってきたのである。自分の意志で結婚相手を自由に選択できる

のだという「権利」を知った女性達は、こぞって自由な愛を求めるようになった。いわゆる「新しい女性」の出現である。

ところが、これらの新しい女性たちが求めてやまなかった自由恋愛とは、個人の自由を束縛する封建制度に対する反発でも、男女平等や女性の社会的地位、権利を主張するものでもなかった。それは、儒教道徳という名のもとで長い間抑圧されていた性からの解放を意味するものであった。もちろん彼女たちも最初から女性の性的解放や性道徳の一新を主張したわけではない。

例えば、一九一〇年代に日本に留学して自由主義の洗礼を受けた羅恵錫、金一葉、金明淳らの初期女流文学者たちは、留学当初は自由な男女交際と恋愛を追求することによって、女性の社会的地位・権利の向上に励んだ。しかし、いつのまにか男性の性的支配から解放されることこそ男女平等だと誤解しはじめ、派手な男性遍歴を繰り返すことになったと趙鎮基氏は指摘する³⁷⁾。つまり、新しい女性たちが考えていた自由恋愛とは、ほかでもなく性の解放であった。彼女たちは思い存分自由な性を謳歌した。そうすることによって、男性社会が作り上げた様々な社会規範を破り、家父長制度にひずみをもたらして、いつかは男女平等を勝ち取ることができると思っていたのではなからうか。むろんそれは男女平等の本来の意味ではない。

この現象は、日本における自由恋愛思想が、男性の性的欲望の対

象としてしか見られていなかった女性を、肉体関係を排除した精神的な側面を重視するプラトニック・ラブ至上主義を打ち出すことによって、男女平等思想を根づかせたことと対照的である。

それはともかくも、韓国では一九二〇年代に入ると、自由恋愛をテーマにした書簡体小説がたくさん書かれる。その理由を、男女平等を実現するためであったとするならば、韓国における自由恋愛思想が、初期のプラトニック・ラブ至上主義から男女間の肉体関係を描写する浅薄な恋愛至上主義へと変わっていったのは、むしろ自然な成り行きであったかもしれない。なぜなら、再婚を禁止していた法律³⁸⁾がなくなってから三〇年が過ぎても、依然として貞操観念など、女性を縛る儒教的価値観が権威をもっていた韓国では、結婚に関しては女性が男性と対等な立場で話をするということはほとんど不可能に近かったからである。

こうした儒教的結婚文化にどっぷり浸かっていた男性に、女性を対等な人間として認識させるには、もはや自由恋愛による自由結婚の実践しかなかった。その突破口を切り開いたのが李光洙であった。しかし問題は、早婚の苦しみから勝ち取った李光洙の自由恋愛は、奇しくも女性の権利意識の目覚めと結びついて、性の自由を求める女性解放運動の一部となってしまったことである。

というのは、一九二〇年代半ばから、儒教的価値観の下ではまったく不可能と思われていた不倫や裏切り、あるいは他の男の子供を

妊娠したまま結婚する女性たちが、文学作品の中に多く登場してきたからである^③。小説の中の主人公たちは、なぜ自分たちが不倫をし、婚約者を裏切り、妊娠した事実を隠したまま結婚しなければならなかったのか、その理由を堂々と告白した。むしろ彼女たちが告白に用いていた形式は、いうまでもなく書簡体であった。この事実は注目してもよからう。なぜなら、その手紙の内容とは、

いったい石を投げる方はどっちですか？何が罪であり墮落ですか？それは自由恋愛を渴望する幼い処女にばかり覆いかぶせる名前ではないでしょうか。

しかしながら、いわゆる世道人心を嘆くという彼らはどうですか？蓄妾は離婚防止という名目の下で平気に行われ、芸者遊びは実業家の社交や志士の慰安、三文文士の人間学研究、さらには芸術家の耽美という美名の下で行われている。世間という非道は彼等にとっては正道であり、墮落は社会政策、事業の手段、学問の好材料となっているのですか。しかし、最も恐ろしいのは人間性の根本的な墮落であることを彼等が知っているはずがないということでしょう^④。

というように、表面的には懺悔という形をとっているが、実は自分たちを墮落させた原因は、社会的因習や家父長的権威主義にあると

いう社会批判となっているからである。つまり新しい女性達は、手紙という表現手段を使うことによって、面と向かつては決して取ることの出来なかった大胆な態度、すなわち女性も男性と対等に恋をすることができるのだという男女平等論を打ち出したことである^⑤。新しい女性達は、こぞって不倫、姦通、裏切りをし、それを告白するために手紙を書きまくった^⑥。その結果、韓国では世界に類を見ないたくさんの方簡体小説が書かれ、文壇をあげて書簡体小説が流行るようになったのである。その幕開けが、独歩の「おとづれ」の影響を受けた李光洙の「幼き友へ」であった。

註

- (1) 赤瀬雅子「書簡体小説」(『ジャンル別比較文学論』カルチャー出版社、一九七八年) 六〇～六六頁。
- (2) 星野慎一「ゲーテ」(『欧米作家と日本近代文学4 ドイツ編』教育出版センター、一九七五年) 五七～六四頁参照。①中井喜太郎『旧小説』『ウェルテル』の(抄訳)(『新小説』一八八九(明治二二)年八月十八日)②高山樗牛『淮亭郎の悲哀』(『山形日報』一八九一年七月二三日から九月三〇日)③緑堂野史『わかきエルテルがわづらひ』『しがらみ草紙』一八九三年九月から翌九四年八月)④久保天随『エルテル』完訳

（一九〇四年）。

- （3）金秉喆『韓国近代翻訳文学史研究』（乙酉文化社、一九八八年）四四九頁。氏によれば、一九二〇年代『若きヴェルテルの悩み』の翻訳は四回、作品紹介は六回に及んでいる。翻訳は、次のようである。①金永輔訳『ヴェルテルの悲願』（『時事評論』一九二三年一月号）②白樺訳『少年ヴェルテルの煩惱』（『毎日新報』一九二三年八月十六日〜九月二七日（四〇回連載））③天園訳『若きヴェルテルの悩み』（漢城図書、一九二五年）④赤羅山人訳『若者の悲しみ』（『新民』一九二八年九月〜一〇月）。

- （4）李在銑『韓国短編小説研究』（一潮閣、一九七二年）百十二頁〜百十五頁。

- （5）尹寿英「韓国近代書簡体小説研究」（『一九八九年度梨花女子大学校大学院博士論文』）二十六頁。

- （6）李在銑、前掲載（註4）百六十頁〜百六十二頁。

- （7）尹寿英、前掲載（註5）二九〜三三頁。

- （8）尹寿英、前掲載（註5）三十頁。

- （9）金一根「諺簡の諸学的考察」（『諺簡の研究』建国大学校出版部、一九九一年）一一九頁。

- （10）朱鍾演「李光洙の初期短編小説考」（『崔南善と李光洙の文学』（セムン社、一九八一年）一二七頁。

- （11）趙鎮基『韓国近代文学リアリズム研究』（セムン社、一九八九年）二二二頁〜二三三頁。

ただし、有島武郎の『宣言』は、A、Bの二人の学徒間に交換された三七通の往復書簡より成立するいわゆる「相互送信型」書簡体小説である。韓国における書簡体小説の特徴が、「二方送信型」を特徴とすることを考えると、趙鎮基氏の指摘には首肯しがたいところがある。

- （12）暉峻康隆『日本の書簡体小説』（越後屋書房社、一九四三年）一〜十頁参照。

- （13）暉峻康隆、前掲載（註12）に同じ。

- （14）村松定孝『近代作家書簡文鑑賞辞典』（東京堂出版、一九九二年）参照。

- （15）滝藤満義「書簡」（『国文学 解釈と鑑賞』特集国木田独歩の世界、一九九一年二月）一四四頁。

- （16）尹寿英、前掲載（註5）四三頁〜四四頁。

- （17）「幼き友へ」は、一九一七年、『青春』に三回に分けて発表された作品である。しかし、李光洙が、「幼き友へ」について語るとき、必ず一九一四年に執筆したと述べているし、金東仁も「春園研究」の中で、「幼き友へ」は、春園が一年間の外国放浪生活から帰ってきて、再び五山学校に勤務している時に書いたものだとし、一九一四年に該当するという指摘

をしている。

この指摘に基づいて、宋敏鎬「春園の習作期作品と長篇『無情』」(『国語国文学』、二五集)をはじめ、權正浩「春園の『幼き友へ』小考―内容構造を中心に―」(『国語教育』四九・五〇号、一九八四年二月)などは、「幼き友へ」の執筆時期を一九一四年頃だと言っている。これに対して、三枝壽勝氏は、『無情』における類型的要素について「李光洙研究」(『朝鮮学報』百十七輯、一九八五年一〇月)の中で、李光洙は自分の体験を小説の中で使うとき、その事柄を変形させたり、事件の前後関係を逆転させたりすることが往々に見られる。従って、李光洙自身の恋愛体験が色濃く反映されている「幼き友へ」を一九一四年に書いたとする彼の回想は、はなはだ疑わしいところがあり、たとえ書いたとしても、それは作品の前半部分の一部に限られるはずだと指摘している。これらの指摘を総合すると、李光洙が一九一四年頃には、すでに書簡体を叙述形式とする小説を書くようとして「幼き友へ」を構想していたことは間違いない事実と考えられる。

- (18) 李光洙「ゲートと私」(『李光洙全集』十六巻)三三中堂、一九六二年、以下李光洙全集とする)四〇二頁。

- (19) 詳しくは註(23)の波田野節子氏の論文を参照すること。

- (20) 李光洙「多難たる半生の途程」(『李光洙全集十四巻』)三九

一頁。

- (21) 李光洙「李光洙氏との交談録」(『李光洙全集二〇巻』)二四八頁。

- (22) 李光洙「無情を書く時とその後」(『李光洙全集十四巻』)四〇〇頁。

- (23) 波田野節子氏は、「獄中豪傑の世界―李光洙の中学時代の読書歴と日本文学」(『朝鮮学報』第百四三輯、一九九二年)の中で中学時代の李光洙の読書歴を具体的に調査・分析して李光洙が中学時代にもっとも関心をもって読んでいた作家は、木下尚江、バイロン、トルストイだったと指摘した。しかし、波田野氏が挙げている作品の中には国木田独歩の作品意外には書簡体形式の作品は含まれていない。したがって書簡体形式の作品がもっとも多かった国木田独歩の作品を読むほかなかったと思われる。

- (24) 李光洙「趙容萬氏との対談」ただし、白川豊氏の「韓国近代文学草創期の日本の影響―文人たちの日本留学体験を中心に―」(『一九八一年度東国大学大学院修士論文』)六八頁による。

- (25) 李光洙「私の少年時代―十八才少年が東京で書いた日記」(『李光洙全集』十九巻)十七頁。

- (26) 中島健蔵「解題」(『国木田独歩全集』九巻、学習研究社、一九六六年、以下独歩全集とする)五五〇頁。

- (27) 国木田独歩「一句一節一章録」(『独歩全集』九卷、学習研究社、一九六六年) 一二二～一二四頁。
- (28) 金秉喆『韓国近代西洋文学移入史研究(上)』(乙酉文化社、ソウル、一九八九年) 六一頁。氏によれば、韓国ではドストエフスキーの『貧しき人々』は、一九一九年二月号『三光』にドレミ生(洪蘭坡)によって『愛する友へ』という題名で翻訳・紹介されたが、『三光』誌の終刊によって中断した。これが韓国に紹介された最初の西欧書簡体小説である。
- (29) 金秉喆によれば、一九〇〇年代から一九二〇年代の翻訳のほとんどは日本語からの重訳か抄訳、ないしは梗概訳であり、完訳が出るのは一九三〇年代に入ってからだという。
- (30) 星野慎一、前掲載(註2)に同じ。
- (31) 拙考「季光洙の初期書簡体小説に現れた国木田独歩の影響―「幼き友へ」と「おとづれ」(『日語日文学研究』二十四輯、一九九四年)、「韓国の近代文学に現れた国木田独歩の影響―響Ⅲ―季光洙の場合」(『文学研究論集』第十号、一九九五年)、「韓国の近代文学における国木田独歩の受容の諸様相―田榮澤、金東仁、季光洙を例として」(『朝鮮学報』第百五十八輯、一九九六年七月)、「少年時代への憧憬―同名小説『少年の悲哀』をめぐって」(『稿本近代文学』第二二集、一九九七年)において、季光洙は、独歩の「日の出」「おとづれ」「少年の悲哀」の影響を受けて、「献身者」「幼き友へ」「少年の悲哀」を執筆したと指摘した。
- (32) 朱鍾演「季光洙の初期短編小説考」(『崔南善と季光洙の文学』セムン社、一九八一年) 一二二～一二八頁。
- (33) 季光洙「婚姻に関する管見」(『季光洙全集』一卷) 五五頁。
- (34) 尹寿英、前掲載(註5) 九〇～九二頁。
- (35) 李在銑、前掲載(註4) 一六二頁。
- (36) 佐伯順子の『恋愛の起源』(集英社、二〇〇〇年) 及び『愛と色の比較文化史』で取り扱われている恋愛小説のなかには、書簡形式で書かれた小説はない。
- (37) ・趙鎮基『韓国現代小説研究』(学文社、一九九一年) 二七七～二八〇頁。
- (38) 一八九四年甲午改革の際に、社会制度として早婚禁止、再婚の自由などが項目が法的に作られた。
- (39) 尹寿英、前掲載(註5) 一一九～一二二頁。
- (40) 廉想渉「除夜」(『廉想渉全集』民音社、一九八七) 六二頁。「除夜」(一九二二年) は、「性的」に極めて「解放的」であった一人のインテリ女性が、自殺に至るまでのいきさつを告白した書簡体小説である。「除夜」は、自由恋愛を渴望する新しい女性たちが、現実という大きい壁にぶつかって挫折していく様子を描いた作品である。作者は、遺書という形を借り

て、女性にのみ貞操を強要する現実を告発することによって、当時批判の対象となっていた新女性の立場に理解を求めた。

(41) 尹寿英、前掲載(註5) 一一五頁。

(42) 尹寿英、前掲載(註5) 氏は、女性が自らの不倫を告白することによって、男性的愛情慣習への自己反省、ないし慣習的愛情の批判を浮き彫りにした作品として、「除夜」「最後の手紙」「出奔した妻の手紙」「J医者の告白」「負債」「前妻記」などを挙げている。

요지

연애, 편지, 그리고 서간체소설 - 이광수 「어린 벗에게」와 돛보 「오토즈레」 -

정 귀련

일찍이 동아시아에는 「연애」라는 말은 존재하지 않았다. 「연애」는 19세기말엽 서양의 문물·문화의 수용에 적극적이었던 일본이 그때까지 남녀간의 사모의 감정을 표현해 오던 「色」「情」「愛」「戀」에 대한 새로운 개념으로서 영어의 「러브」를 번역하여 만든 조어이다. 이 새로운 말과 사상이 한국과 중국에 수용되어 유교 문화권하의 동아시아 사회의 결혼관 및 연애관을 뒤흔들어 놓은 것은 주지의 사실이다. 특히 유교사상이 철저했던 한국에 있어서의 자유연애에 대한 관심은 근대의식의 고취와 근대적 자아의 확립이라는 측면에서 강조되는 등 자유연애는 근대화를 위한 중요한 테마의 하나로 취급하게 되었다.

1910년대에 들어서면 이러한 자유연애를 통한 자아의 발견을 제재로 한 작품이 많이 등장한다. 그 출발점이 된 작품이 이광수의 「어린 벗에게」(1917)이다. 「어린 벗에게」는 당대에 가장 첨예하게 대두된 자유연애 사상을 서간형식으로 전달한 작품으로서 그 중심 테마는 애정과 윤리의 갈등을 거쳐 윤리가 승리하는 사랑, 즉 육체관계를 초월한 플라토닉 러브이다. 그것이 1920년대에 들어서면서 점차로 남녀간의 흥미위주의 애정문제로 변모하기 시작하여 1920년대 중반부터 불륜과 간통을 되풀이 하는 천박한 연애지상주의 소설이 등장하기 시작하였다.

이 소설의 큰 특징은 배반과 불륜, 간통을 되풀이 하는 타락한 주인공들이 자신들의 불륜과 간통을 편지로 고백하기 시작하였다는 점이다. 그 결과 한국에서는 세계에서 그 예를 볼 수가 없을 정도로 많은 서간체 소설이 집필되어 한때 문단을 중심으로 서간체 소설 붐이 일어났을 정도이다.

본고는 한국 최초의 근대적 서간체소설인 「어린 벗에게」가 일본의 근대단편문학의 개척자로 알려진 구니키다 돛보의 서간체소설 「오토즈레」(1897)의 영향을 받았다는 사실을 중심으로 특히 한국문학에 있어서의 서간체 소설양식의 도입과 수용과정을 고찰하였다.

(2001年10月30日受理)